東京天台

平成二十一年
春彼岸号

発行所
天台宗東京教区
〒107-0062 東京都港区南青山1-3-22
TEL.03-5785-3481
寺本亮洞

http://www.tendaitokyo.jp/

地域福祉支援のあり方と寺院の関わり

目黒大圓寺 福祉作業所「竹の子坊」を訪ねて

仏教寺院の福祉に対する歴史は古く、飛鳥時代（6世紀）にまでさかのぼります。特に、鎌倉時代には仏教寺院が福祉活動をしたという文献が数多く残っており、代表的なのは鎌倉にある極楽寺において、弱者救済の活動を展開した僧・忍性（にんしょう）などが挙げられます。

（極楽寺の忍性は、広大な境内に現代の病院にあたる建物を建て、日夜多数の病人を収容し、貧者には無料で加療・施薬をした。今では昔の面影はないが、薬草をすり潰した石臼と石鉢が、偉業を伝えている。）

大圓寺本堂

目黒の大圓寺では6年前に福祉作業所である「竹の子坊」を開設しました。

ここには、2団体の知的障がい者事業所が入り、さまざまな品物やお弁当などを作っています。東京に限らず、全国にハンデを抱える方のための就労団体は数多くあります。しかし、現実は事業所を継続的に運営するのは大変困難な上、その様な団体が財政面や衛生面、かつ安全に作業ができる場は常に不足しています。

そんな中、大圓寺では地域に何か貢献したいと永年思い続け、方法を探っていました。この思いと施設の不足という現実が一致し、「竹の子坊」の開設に至りました。

「竹の子坊」では、福祉支援としてこのような作業所を提供するだけでなく、お寺の行事の際には境内において作業所で作った物を販売しています。その様な活動の中、作業所では縁起物なども作られるようになり、お参りの方々にも喜ばれています。

福祉作業所「竹の子坊」

福祉（WELFARE）とは、英語でも意味がとれるように、良く（WELL）暮らす（FARE）、すなわち幸福を求める活動にあります。この様な施設をもっと増やして、作業所で働く方々に喜んで欲しいものです。

お寺という場を通して、お参りに来た人々と作業所で働く人々との交流の架け橋になりたい。また、都心にありながらも心温まる、つながりを大切に出来る場を持てるよう、大圓寺の地域福祉活動は行われています。

「竹の子坊」での作業風景

現代社会と仏教

「苦」から得ること

このまま地球温暖化が進むと、数十年後には九州南部の桜が咲かなくなるかも・・・というニュースを聞いた。

桜も、そして私たちも冬の寒さにじっと耐えるからこそ、春の暖かな気候と共に桜花爛漫をよろこび、楽しむことが出来る。冬は寒くて良いのである。いや、寒くなければいけないのである。これは常日頃自分の人生にも重ね合わせてみることが出来る。

生老病死の「四苦」はよく知られるところである。さらに怨憎会苦、愛別離苦などの苦しみも同時に説かれているところをみると、なるほど釈尊当時の人々も現代の我々と左程変わらぬ思いをしていたのだろう。

健康なことは何より有り難い。しかし同時に私たちは病気になる身であることをよくよく知らなければならない。少しでも病を得たことのある人なら、看病してくれる人のあたたかさに気付くはずである。健康の有り難さ、日々元気に活動できることへのよろこびを知ることが出来るのは病のお陰である。健康な時には悠々と怠けていても、いざ病気で伏せているときほど、健康であれば何でも出来るじゃないか、などといろいろなことを考えるものである。また、病に苦しむ人への心からの理解も、同じ病で苦しんだことのある人ならではのものがあるのではないか。

～怨憎会苦～　誰でも嫌な人の一人や二人は周りに居るのではないか。そんな人に会わなければならない現実は確かに苦しみそのものであり、出来れば避けたいものである。しかし、見方を変えると、だからこそ自分にとって気の合う仲間とのホッとするひとときや、さりげない親切心のありがたさに気付くような気がするのである。周囲が自分にとって都合のよい人ばかりでいると、ちょっとした優しさにも鈍感になってしまうのではないだろうか。だから、怨憎会苦も単なる「苦しみ」というよりは、人生を豊かにしてくれるために必要なのだ、と考えたらどうだろう。桜花爛漫のためには厳しい冬の寒さが必要なのと同じように・・・

～愛別離苦～　たとえ今が幸せでも、愛する者との別れは老若男女を問わず何かしらの形で必ず訪れる。たとえ身近でなくとも弔事に立ち会ったときには、家族でもいい、職場でもいい、お互いがそれぞれの存在の有り難さ、命があることの奇跡について少しでも考えてみてほしい。きっと些細なトラブルなどお互いに許し合え、心を開いてゆくことが出来るのではないだろうか。

逆境や辛苦から目を外らしてはならない。必ず人生の豊かさに繋がってゆくことを信じて、ここは耐え忍んでみようではないか。

声明　ブラジル公演

二〇〇八年十一月二四日から十二月九日まで、海外布教の一環として、天台声明音律研究会ブラジル公演が文化庁の助成により行われた。

「舞楽法会」と名付けられたこの公演では、雅楽と舞楽を織り交ぜて創り上げられた荘厳な舞台が披露された。

二〇〇八年は日本人のブラジル集団移住一〇〇周年にあたる記念の年であり、「日伯交流年」と銘打たれて両国間の国際交流が盛んに行われた。「舞楽法会」も単なる日本の伝統文化の紹介ではなく、日本から遠く離れた地で努力を重ねた先人の苦労を思い、また、今後の日伯友好を願い、披露されたのである。

公演はブラジル国内の四都市六会場を巡って行われた。日系人だけでなく様々な人種の方々が集い、どの会場でも多くの拍手と賞賛を頂いた。言葉は通じなくとも何かを感じてもらえただろう。

また、滞在期間中には、南米唯一の天台宗別院である成願寺にも参拝を行った。境内には大きな伽藍や鐘楼が建ち並び、多くの信者の心の拠り所となっている様が窺えた。地球の裏側の国で、それもカトリックの信仰が大半の国で、天台の教えを地道に広めている。

布教の精神をあらためて学んだ旅となった。

"声明"
節をつけ、仏を讃えるお経のこと

井戸端会議

住職婦人のみなさんと

寺は住職だけでなく様々な力に支えられている。

そこで、住職夫人の皆さんに普段思っていることを聞いてみようと、とある会合の席にお邪魔してみた。

まずはお寺に入ったきっかけは？

■ 恋愛した相手がたまたまお寺の人でした。(笑)

抵抗はありませんでしたか？

■ 特にありませんでしたが、何がなんだか分からないうちに今日まで…。

■ 私もそうでした。最初は何をして良いのか全く分からなかったけど、母の背中を見てだんだんと覚えていきました。ただ、何年か経って「これで良いのか？」と思うこともある。

苦労話などがありましたら…。

■ 「定休日」が全く無いこと。毎日お客さんが見えたり、電話が鳴ったり。考えてみたら子供が小さい時、日曜日は必ずと言って良い程に法事があって…。運動会に行ってあげられなかった。毎回の様に友達の所や近所の人に預けてしまい、可哀そうな事をしたと思う。

■ 私のところは、毎回行ってあげたけど。

事情はお寺によって違いますからね(汗)。

今度は、次世代のお寺について若い世代に対して…。

■ 私は(息子夫婦と)一緒に話すようにしています。今の時代にあったお寺の役割みたいなことを話します。

■ 昔のやり方を強制しないように考えてる。

■ でも、ある程度基本的な作法などは、大事でしょう。

■ 昔自分が言われた小言が、今になって大事なことだったと思うことがある。

■ (時代の変化と共に)システムは変わると思うけど、変わらない部分もある。人の「心」の部分がお寺なんでは。

■ 私たちの時代には、学校を出ていきなりお寺に入る事はまず無かった。在学中のアルバイト然り、勤めに出るのも良いことだと思う。もしくは、小僧さんになって「他人の飯を」って大事では。

ところで、最近の新聞の投書に「お寺も炊き出ししては」との内容が掲載されていました。どのようにお考えでしょうか。

■ もちろん、やった方が良いとは思う。でも、一ヵ寺でやろうとすると対処が大変。だから、ご近所と協力するか仏教会などで組織的に取り組むと良いんじゃないかしら。

■ 阪神淡路大震災の時は、天台のお寺で炊き出ししてましたよね。

■ 東京都から、依頼きてたんじゃない？

■ 例えば東京でホントに地震となったら「嫌だの」って言っていられないでしょ。

■ ウチは、近所の方が「何かあったらお寺に行こう」って言ってくれます。

■ 若い人たちも、講習会でも開いてボランティアの勉強すれば良いんじゃないかしら。

仰る通りでございます。(泣)

■ 常日頃のお付き合いから、良い関係を築くと良いんでしょう。

全体を通して感じたことは、住職夫人の皆様は将来のお寺に対して様々な持論をお持ちの様でした(実際何の質問をしても、その方向へ行ってしまい…)

これからも、この「勢い」でお寺を守ってくださることを期待いたします。

第40回

一隅を照らす運動［東京大会］

平成21年6月6日(土)

午後1時開会《九段会館大ホール》

法要

導師　輪王寺門跡
神田秀順大僧正

天台宗東京教区寺院

天台聲明音律研究会

天台雅楽会

講演

仏教思想家

ひろ さちや氏

演題

「伝教大師 最澄のこころ」

経歴

1936年　大阪市に生まれる。
1960年　東京大学文学部インド哲学科を卒業。
1965年　同大学博士課程を修了。
気象大学校講師となり、のち助教授、教授として20年間教壇に立つ。

天台の寺めぐり ㉗ 江戸川区平井周辺

からたち寺 成就寺

成就寺は、嘉祥元年（八四八）慈覚大師円仁が浅草寺に立ち寄られた際、隅田川の対岸の地（現在の墨田区役所の近く）に創建された寺である。

江戸時代末頃の成就寺周辺の地名は本所中之郷竹町といわれ、寺の周囲には枳（からたち）の生垣が植えられていた。当時、境内に祀られていた宝珠稲荷の縁日には、できものの治療に使われていた枳のトゲを求める多くの人々で賑わっており、「からたち寺」として親しまれていた。

江戸時代の大火により度々被災し、特に関東大震災では毘沙門天像と脇侍の像以外、灰じんに帰してしまった。震災後の復興事業により、現在の地（江戸川区平井）に移転された。

現在の本尊である阿弥陀如来、脇侍の観音菩薩・勢至菩薩の三尊は、縁寺の墨田区木母寺より請来されたものである。

また、山門をくぐった右側に「岩舟地蔵」と親しまれている岩舟の上に立つお地蔵様がある。このお地蔵様は、かつて荒川での水難者を供養する共同墓地が成就寺と隣接しており、その墓地を改修して公園になった時に移されお祀りされたものである。

岩舟地蔵

毘沙門天

目黄不動 最勝寺

最勝寺は貞観二年（八六〇）慈覚大師円仁が、隅田川畔（現在の墨田区向島）において自ら釈迦如来像と大日如来像を刻み、これを本尊として創建され、その後、本所表町（現在の墨田区東駒形）に移転された。

徳川家の崇敬が篤く、将軍が鷹狩りの際にしばしば立ち寄られていた。明治の神仏分離に至るまで、牛島神社の別当をつとめていた為、山号は「牛宝山」と号されている。

不動堂に奉安されている不動明王像は、特に仏法崇敬に篤かった三代将軍家光公が設けた、江戸府内五色不動（目黒・目白・目青・目赤・目黄）の一つ、目黄不動と称されている。この不動明王像は、天平年間（七二九～七六六）奈良東大寺初代別当であった良弁僧都が、隅田川畔で不動明王を感得され、自ら刻まれた像である。その後、最勝寺の末寺で本所表町にあった東栄寺の本尊として祀られ、江戸の町を守護する不動尊として民衆に広く信仰されたのである。

明治の神仏分離により、東栄寺は惜しくも廃寺となり、本尊であった不動明王像は最勝寺へ遷座された。そして明治末の駒形橋架橋に先立つ区画整理により、江戸川区平井へ移転し今日に至っている。

目黄不動

不動堂